Japanese Journal of Applied Psychology
2004, Vol. 30, No. 1, 10-23

総　説

自叙写真による自己概念研究

向山泰代*

Auto-photographic Studies in Self-concept Research

Yasuyo MUKOYAMA*

The use of photographs in self-concept research was discussed by focusing on auto-photographic studies. First, we presented the outline and purposes of the auto-photographic approach, and reviewed the preceding studies of the approach. Second, characteristic features and usefulness of the auto-photographic method were examined in comparison to the methods of verbal measurement. The auto-photographic method was considered to be one of the ideographic methods and supplements the methods of verbal measurement. Third, based on Cognitive-Experiential Self-Theory (Epstein, 1983, 1990, 1994), we explained self-concept, which functions at the three conscious levels, conscious, preconscious, and unconscious. And we discussed the methods of measurement of self-concept suitable to these conscious levels. The auto-photographic approach was found to be significant because of the possibility of exposing the content of self-concept (that is, the experiential conceptual system) functioning at the preconscious level. Finally, we reviewed the use of photographs different from the auto-photography, and discussed the unique features of the auto-photographic approach.

key words: auto-photography, self-concept, preconscious, photograph

自己概念の研究ではこれまで，被験者の言語反応からその内容や構造を捉えようとする方法が主流をなしてきた。その測定ツールの代表的なものがセルフ・ディファレンシャル（長島・藤原・原野・斎藤・堀，1966, 1967），“あなたは誰ですか？”テスト（Who are You?: Bugental & Zelen, 1950, 以下WAYとする），20答法（Twenty Statements Test: Kuhn & McPartland, 1954, 以下TSTとする）などの質問紙を用いた研究である。これら質問紙による研究は，自己概念のうちで内省によって明瞭に意識化でき，かつ言語によって捉えられる部分に焦点をあてたものといえる。ところが，自己概念はそのすべてを意識化できるものではなく，大部分が暗黙的であって明瞭に言語化するのも困難であり，しかもこのような暗黙の自己概念は我々が通常意識している自己概念とともに人の行動に大きな影響を及ぼすという考え方がある（Epstein, 1983, 1990, 1994）。

本稿ではこのような考え方を受け，我々が，普段あまり意識することのない自己の側面にできるだけ気づくことができ，かつそのような側面を言語によらずに測定する方法について考えてみたい。その一手段として，ここでは非言語的な方法，特に写真という手段および素材に注目する。以下では，写真が自己概念の研究でどのように用いられてきたかについて先行研究を展望し，続いて従来の言語を用いた方法と比較しながら写真という手段・素材の特徴をまとめ，自己概念の研究において写真を測定手段と

* 京都ノートルダム女子大学人間文化学部生涯発達心理学科
Department of Life-long Developmental Psychology, Faculty of Humanities and Social Sciences, Kyoto Notredame University

して用いることの有用性や意義について述べたい。なお，本稿では自己概念の分野に限って展望を行うため，その代表的な手法である自叙写真(auto-photography)を用いた研究を中心に概観するが，写真の特徴と利用可能性を様々な面から示すために，自叙写真以外での写真の使用例についてもできるかぎり紹介してゆく。

自叙写真の概要

自叙写真は“あなたは誰ですか？”という問いかけに写真で回答するよう被験者に求め，撮影された写真を通して回答者の自己概念を把握しようとする方法である。先に述べたとおり，自己概念は質問紙法を中心としてこれまで様々な方法で測定が試みられてきたが，質問紙法の中でもBugental & Zelen (1950)のWAYやKuhn & McPartland (1954)のTSTは，回答者が自分自身について自由に記述できることから，自己概念を個性記述的に捉える方法といわれてきた。自叙写真での“あなたは誰ですか？”という問いかけはWAYと同様ながら，回答者はこの問いに言語ではなく写真という非言語的素材を用いて答える。このことから，自叙写真はWAYやTSTの持つ回答の自由度の高さと，“イメージを凍結させる機械としてのカメラ (Milgram, 1976)”の特徴を活かした測定方法と見なされている。この方法はCombs & Ziller (1977)により米国で創案され，これまで概ね以下のような手続きに従って実施されてきた。

被験者には，“あなたが自分自身をどのように見ているのかを写真で記述して欲しいのです。写真であなたが誰であるかを語って下さい。撮影し終わった時には，あなた自身についての1冊の写真集ができあがることになるでしょう”と教示し，操作の簡単なフラッシュ付きのインスタント・カメラを使って一定期間内に自分の思うままに写真を撮影してくるよう求める。先行研究での教示はZiller & Lewis (1981)を踏襲したものが多いが，通常，写真は“撮影者自身が見た自分”を伝えるものになるよう教示の中で強調される。また留意点として，被験者自身について語るものなら何をどのように写しても自由であること，自分で撮れない場合は他人に撮影を依頼しても良いこと，実験者は被験者の撮影技術の優劣には関心がないことが伝えられる。教示や実施方法は研究の発展に伴い，一部変更や改良が試みられてきており，例えば，撮影期間は一応6日間としておくが，被験者の意向を尊重して希望があれば期間を延長するとか(Ziller & Rorer, 1985)，セメスターの最初に教示を行ってセメスター中の任意の時期に撮影させる(Dollinger & Clancy, 1993)，あるいはセメスター中の11週間を指定する(Dollinger, Robinson, & Ross, 1999)などの例がある。撮影枚数については，自叙写真を最初に公表したZillerらにならい，後続の研究の多くが12枚を採択しているが，手続きの簡易化のために6枚としたものや(Ziller & Rorer, 1985, Study 2)，自己概念をより確実に把握するための試みとして20枚を指定した研究もある(Dollinger, Preston, O'Brien, & DiLalla, 1996)[1]。この他，近年ではZiller & Lewis (1981)の教示に続けて，よくある質問に対処するために新たな教示を付け加えた研究も見られる(Dollinger, Cook, & Robinson, 1999; Dollinger, Robinson et al., 1999)。収集する資料についても創案当初は自叙写真のみを資料としていたが，その後，研究の目的に応じて様々な工夫が加味されてきている。集団を対象とした研究では，写真を台紙に貼り冊子として提出させる(Dollinger & Clancy, 1993)，写真冊子と併せて写真や写真冊子へのコメントを提出させる(Dollinger, Cook et al., 1999; Dollinger, Robinson et al., 1999)，現像した写真を返却する際に被験者に解釈を求める(Ziller & Rorer, 1985, Study 2)といった方法の他に，個人カウンセリングで自叙写真を用いた例では，クライエントに写真についての簡単な説明を書かせるとともに自分をよく記述していると思うものから順位を付けさせ，その順位に従って1枚の大きな台紙に貼るよう求める(Amerikaner, Schauble, & Ziller, 1980)などの方法が採られている。

収集された自叙写真は，回答者の自己のあり方を把握するために，これまで以下の2つの方法で分析・検討されてきている。第1は被写体や内容にもとづいて個々の自叙写真をカテゴリー分類する方法，第2は自叙写真を通覧して冊子全体の印象を評定する方法である。前者の例として，自叙写真が最

1) 先行研究では12枚という撮影枚数の根拠は明らかではない。撮影枚数と撮影期間に関する実証研究は向山(2003, 2004)を参照のこと。

初に紹介されたCombs & Ziller (1977)では，大学内のクリニックへの来談者とカウンセリング経験のない大学生の自叙写真を9つのカテゴリーに分類して比較し，来談者の自叙写真には家族や過去カテゴリーに分類される写真が多い一方で，自分自身・活動・書籍カテゴリーに含まれる写真が少ないことを報告し，来談者の自己概念の特徴を指摘したものがある。この他，写真を分類するためにどの程度のカテゴリー数を必要としたかというカテゴリー範囲(range)を取り上げた研究もある（Ziller & Rorer, 1985; 向山，2001, 2002a)。一方，後者の自叙写真を通覧して冊子全体の印象を評定する方法の例としてDollinger & Clancy (1993)では，抽象度・自己内省度・芸術的質の高さの観点から写真冊子の“自己叙述の豊かさ(richness of self-description)”を5段階で評定し，NEO-PIの開放性(O)の高い者に自己叙述の豊かな写真が多いことを報告したものがある。なお，この研究では，外向性(E)および調和性(A)と人物を被写体とした対人的志向カテゴリーに分類される写真との関連も指摘されている。なお，写真冊子の評定は，さらに多次元性という観点を加えて，自叙写真によって被験者の“個性(individuality)”の程度を査定する方向へと発展しつつある(e.g. Dollinger et al., 1996)。

以上のように，自叙写真や写真冊子の分類や評定を通して，例えば回答者のカウンセリング経験の有無やパーソナリティ特性の違いによって自己概念に包含される対象の内容，あるいは自己叙述の豊かさや個性といった言葉で表現されるような反応の質が異なることが示されてきている。

自叙写真の目的

続いて自叙写真の創案者であるZillerの論文をもとに，この方法の目指すものについてまとめてみたい。先に紹介したCombs & Ziller (1977)では，カウンセリング経験者とカウンセリング未経験者の自叙写真を比較し，それぞれの自己概念の特徴を報告しているが，この論文では冒頭にRogersとJourardを引用しながら，カウンセラーには“個々のクライエントの内的枠組み(internal reference of each client)”を知覚する能力が重要であること，カウンセラーが“クライエントの現象的な場(the phenomenal field of the client)”を経験することで自己開示を促進しうることを述べている。つまり，他者を理解することとは，その個人が自己を含む世界をどのように理解し，経験しているのかを知ることであるとZillerらは考えているのである。さらに個人カウンセリングの中で自叙写真を実践した報告(Amerikaner et al., 1980)では，上記のようなクライエント自身の参照枠やクライエントにとって重要な意味次元を強調する考えはKelly (1955)の個人構成体理論に依拠していることを述べている。クライエントが世界を理解するために発展させてきた次元には言語的なものと非言語的なものがあり，レパートリー・グリッド・テスト(Repertory Grid Test)などを用いた言語的次元の査定に加えて，非言語的な次元を査定する必要性を主張し，そのための最初の試みとして自叙写真を提案している。またこの論文の中では，クライエント理解のために写真をどのような次元で利用するかについても具体的な提案を行っている。

ところでZillerらは，環境内にその人にとって状況を有意味にする個人的な参照点(reference points)の存在を主張する。これらはorientationsと呼ばれており，Ziller (1990)では次のような説明がなされている。すなわちorientationsとは，環境内にある無数の選択肢の中から当人が選択的に注意を向けた人，対象，情景などからなり，これらは個人にとっての“心理的な適所(psychological niche)”を構成している。そして，自己概念はこのような選択的注意を向けた対象，すなわちorientationsと緊密に結びついており，その中心となるものである。したがってこれらの対象を知ることは個人の世界を知ること，ひいてはその人自身を理解することにつながることになる。通常，orientationsはイメージとして表象されていると考えられており，自叙写真はこれらのイメージを写真という媒体で把握する試みといえる。

Ziller & Rorer (1985)によれば，orientationsを写真で記録するという自叙写真のルーツは，ナバホ・インディアンたちに自らが選んだ対象を映像化するよう求めた1972年のWorthとAdairの研究にある。彼らはこれに“生態記録(biodocumentary)”という名称を与えた。この言葉が示すように，Zillerらは実験室での実験や質問紙による測定を超えて，その個人が現実に生活している環境下で

人間を研究することの重要性を強調しており，自叙写真は被験者にとって侵害感や抵抗感の少ない測定法となると考えている。写真を用いることによって，個人が生活している環境をその人の視点から具体的かつありのままに記述することが可能であり，この点で自叙写真は彼らの目的に合致した手段と思われる。

さらに彼らは，個人がいかなる環境を選択し，他方，選択された環境によってどのようにその人の行動が制限，あるいはコントロールされるのかといった人と環境との相互作用に関心を持つ。被験者は“あなたは誰であるかを写真で表現する”という課題に答えるために，写真に写すもの（撮影可能な自己像）を探索する必要に迫られる。この過程で，被験者は通常はほとんど意識することなく過ごしている自分の周囲の環境に改めて注意を向けることになろう。そして“写真を撮る”という行為を通じて，被写体として選択された事物・事象が自分自身にとっていかなる意味を持つのかを考えることになるだろう。したがって，自叙写真はZillerらが意図したように，被験者にとっては人と環境との相互作用のあり方を再確認させ，他方，実験者にとっては当該個人と環境との相互作用を調べるための有効な資料を提供することになるといえよう。

自叙写真を用いた研究

ここまで自叙写真の概要と目的について述べてきた。続いて自叙写真を用いた先行研究を概観するが，その際，先に述べた2つの分析方法―被写体や内容にもとづいて個々の自叙写真をカテゴリー分類する方法と自叙写真を通覧して冊子全体の印象を評定する方法―に分けて紹介し，加えて事例研究としての使用についても言及する。

被写体や内容にもとづいて自叙写真をカテゴリー分類する方法はZillerの研究グループが主に採択してきた方法で，ある特徴を持つ被験者とそれ以外の者とで被写体や内容を比較し，それぞれが自己を含む世界をどのように理解し，経験しているかを捉えようとするものである。例えばZiller & Rorer (1985)では，シャイネス調査での高得点者は低得点者に比べて自分自身や他者を写した人物写真が少なく，美的カテゴリーに含まれる写真（芸術作品，樹木，湖や池，花）が多いことを報告し，シャイネスの程度によってZillerのいう“心理的適所”が異なることを示した。また，シャイな人々は通常ネガティブに評価されやすいとして，自叙写真を通じて彼らの視点から環境を理解することの重要性を論じている。この他，Ziller & Lewis (1981)では書籍の写真の多さを学業達成の指標，植物・風景・芸術作品の写真の多さを美的志向の指標と見なして，前者と学業成績，後者とオールポート・ヴァーノンの美的価値志向の尺度得点の高さを調べ，それぞれに関連が見られたことを報告している。続く研究2では，矯正施設入所中の非行少年と公立高校の非行歴のない少年の自叙写真を美的・学業達成・学校・社会（人物）カテゴリーで比較し，非行少年群で美的・学業達成・学校カテゴリーの写真が少なく，社会（人物）カテゴリーの写真が多いことを示した。また，日米の高齢者を比較した研究 (Okura, Ziller, & Osawa, 1985–1986) では，日本の高齢者では庭・住宅・自宅内やその周辺の写真が多く，一方，米国の高齢者は様々な人を被写体とした写真が多いことを報告し，老年期の平穏 (peace) を何に求めるかが日米で異なるのではないかと考察している。

以上のように自叙写真について被写体の数をカウントしたりその内容を調べたりする方法は素朴であるが，Zillerが主張する“個人が自己を含む世界をどのように理解し，経験しているのかを知る”という目的に合致したものといえよう。女子大学生を対象とした本邦での結果では，被写体は大きく“人物”“場所”“物”の3つのカテゴリーに分類できること，また課題に参加した者の自由記述から，被写体には“好き・大切・関心・興味・愛・尊敬”などポジティブな感情価を伴う愛着の対象が選ばれることが示唆されている（向山，2002c）。ところで，先の3つのカテゴリーのうち“人物”写真の多さは社会志向あるいは対人志向の測度と関係することが複数の先行研究で確認されている。一方，“人物”以外のカテゴリー，例えば先のZiller & Lewis (1981)の研究で取り上げられた書籍や植物などの写真が学業達成や美的志向の指標として妥当なのか否か，あるいは年齢や文化によって有用なカテゴリーに違いがあるか否かなどについては，さらに研究成果が蓄積される必要があろう。また下位カテゴリーを設定して分類を細分化した場合，研究ごとに異なるカテゴリーが出現して研究間での相互比較が難しくなった

り，分類される写真の枚数が少なくなってカテゴリーそのものの有用性が失われたりすることもありうる。カテゴリー分類の結果を数量的に処理する場合は，これまでに指標としての妥当性が確認されている“人物”写真を中心に行うべきであろう。しかしながら被写体や内容は後に述べるように，個人の現象学的理解や人生を物語的に理解するための手がかりとなるものであり，単に写真枚数のみに注目して数量的に処理するよりも，むしろ被験者へのインタヴューなどを併用しながら，被写体や内容に対して質的検討を加えることがより生産的な方向であると思われる。このような質的アプローチの例として，Monteiro & Dollinger (1998) が行ったブラジルのスラム街の子どもたちを対象とした研究がある。ここでは子どもたちの環境に対するイメージ，社会的・集団的志向性，思春期の子どもとしてのアイデンティティという３つの視点から，男女各10名のストリート・チルドレンの自叙写真を事例的に記述し，この種の環境下にある子どもたちへのステレオ・タイプ的見方や大規模な統計的研究では見過ごされてしまいがちな彼らの現実と苦境について報告している。

次に，自叙写真を通覧して冊子全体の印象を評定する方法であるが，これはDollingerらの研究グループが採択している方法で，彼らはZillerらにならった被写体や内容にもとづく分類に加えて写真冊子全体の印象評定を行う[2)]。彼らの研究は，数百の自叙写真冊子について複数の訓練された評定者が評定を行う手続きを経ており，評定にはリッカート式の５段階尺度を使用しているため，様々な数的処理や他測度との関連を分析することが可能である。この点で先のカテゴリー分類にもとづく分析を補い，さらに発展させたものといえよう。５つの評定段階は，“具体的・想像力が乏しい・平凡・繰り返しが多い（単次元）・自己の記述が表面的”というレベル１から“抽象的・創造力に富む・多次元的・自己内省的・美的感性に富む”というレベル５までに分かれる。

各レベルに含まれる写真冊子の内容や具体例はDollinger & Clancy Dollinger (1997) の付録に詳しいが，その要点をまとめると以下のようである。まず，周囲の人々を紹介した家族アルバム様のものや，自分の住居の各室を次々と撮影するなど繰り返しばかりのもの，自分の好きなことのみを紹介するなどテーマや内容が表面的で単次元の写真冊子はレベル１と評定される。レベル２と評定される写真冊子では，人物の写真もレベル１とは異なり，その人の生活での多様な役割（e.g. 友人・学生・母親・娘など）や関係が強調され，レベル１よりも自己の多次元性がより強く示される。しかし，その思考はまだ具体的で単純である。また身体活動や物質を通した自己表現が多く，このレベルでは一般的に“私がやること（役割）”や“私が好きな物”によって自己定義がなされる。レベル３と評定される写真冊子は，レベル２に比べて思慮深さや真摯な取り組みを伝えるものであり，より自己開示的で象徴的である。このレベルの写真冊子には，自己についての抽象的表現や特性のような性質を伝える写真が含まれている。ただし，そのような写真の枚数は少ないか，もしくは使われている象徴の多くはありきたりのものである。また，多少の創造性は示されているが因習的あるいは性役割ステレオタイプに沿った活動（e.g. ケーキ作りやキルティングなど）の範囲にとどまる。レベル４に評定される写真冊子では，象徴的な写真が多数を占める（e.g. 縫いぐるみの熊が子ども時代の記憶，長く続いている関係，安全への欲求の象徴となるなど）。また，対照的なテーマや複数の写真を結び付けてそれらを統合する試みが見られることもある。このレベルの写真冊子には，自己発見や自己探索への興味が示されており，人生や将来についての思索を表すものもある。このレベルでは，撮影者の創造性を示す証拠はレベル３よりも多く，レベル５より少ない。最も高いレベル５と評定される写真冊子は，それ自体が創造的産物であり，深い自己洞察と創造的表現が見られる。撮影者はこの活動に自己投入しており，課題（e.g. 大学の講義での課題）としての重要性を超えた価値をこれに付与していることが示されている。なお，このレベルには自然および創造的活動や作品の写真が含まれることが多い。

Dollingerらは自叙写真を個性の表現と捉え，写真冊子の評定結果とアイデンティティや自我発達

2) Dollingerらは自叙写真課題を“写真小論(photo essay)”と称し，被験者に写真冊子の作成と併せて写真冊子が自分を表すか否かのまとめもしくは自己分析を記すよう求めている。

(Dollinger et al., 1996), アイデンティティの地位やスタイル (Dollinger & Clancy Dollinger, 1997), 孤独感 (Dollinger, Cook et al., 1999), 創造性 (Dollinger, Robinson et al., 1999) などとの関係について検討している。これまで大学生を対象とした調査から，最も高いレベル5に評定された個性の程度の高い個人について，次のような特徴が示されている。彼らをパーソナリティ特性から見ると，開放性 (O) と神経症傾向 (N) が高く，内向的 (E^-) であるため，人間よりも美的なものや観念的なものに興味を示し，想像力が豊かだがネガティブな感情を感じやすい (Dollinger et al., 1996)。創造性に関係する側面として，パーソナリティ検査では興味の幅や複雑さの尺度得点が高く，創造性検査の課題では語彙連想と流暢さに関して高得点を示した。また，普遍的志向や精神的境界の柔軟性と呼ばれるような態度や価値観を持ち，可能自己 (possible self) として将来に様々な文化に触れる体験を含める傾向が見られた (Dollinger, Robinson et al., 1999)。対人的な傾向として，彼らは孤独感や疎外感，仲間との違和感を抱きやすく，個人カウンセリングを受けた経験も多いことが示された (Dollinger, Cook et al., 1999)。さらにアイデンティティや自我発達との関係では，彼らは社会的あるいは表面的な特徴（e.g. 年齢・性別・外見・所有物など）よりも内的，個人的な性質（e.g. 夢・想像など）によって自分を定義づける傾向があり，集団に従いにくく，共同体としてのアイデンティティ (collective identity) をあまり重視せず，社会で一般的とみなされるような自己定義をしない。例えば，個性の程度が高い者は低い者に比べて，自分の宗教・家族・友人関係などを自己定義のための重要な事柄とみなさない傾向があることが報告されている (Dollinger et al., 1996; Dollinger & Clancy Dollinger, 1997)。

以上，個性の程度の個人差を自叙写真によって捉え，様々な要因との関係を調べた研究についてまとめたが，Dollinger & Clancy Dollinger (2003) では，自叙写真を使って青年期から中年期（18〜54歳）の男女844名を対象に，加齢に伴う個性の変化について調べている。この結果では，概ね加齢に従って個性の得点は上昇するが，特に35歳後半から40歳前半の年齢グループで得点が高いことが示された。この研究は発達的な視点から自叙写真を検討した一例といえよう。各年齢層における個性の様相が，先に述べた青年期を対象に行われた個人差研究で取り上げられてきたパーソナリティその他の要因とどのような関係にあるのか，今後の研究が待たれる。

自叙写真の特徴および自己概念研究への寄与

ここまで自叙写真を用いた先行研究について紹介してきたが，以下ではこの方法が言語を用いた測定法，特にWAYやTSTと比較してどのような特徴を持つのかを，女子大学生を対象とした筆者の研究結果を交えながらまとめ，自己概念研究にいかに寄与するかについて考察する。

言語を用いた測定法と比較した場合，自叙写真の特徴として第1に挙げられるのは，表現の具体性と独自性であると思われる。写真には被写体となる具体的な対象が必要であるため，写真による自己表現は撮影可能な事物・事象を通じてなされる。そのため，写真でパーソナリティなど実体のないものを表現しようとする場合，撮影者はそのパーソナリティを表現する典型的行動や事物を写すか，もしくは類推や象徴表現を採らざるをえない（例えば“怠け者”は炬燵に潜り込んだ自分，散らかった部屋，脱ぎ捨てられたままのパジャマ，日向で眠っている猫，森にいるナマケモノの写真などで表現されるかもしれない)。これら自叙写真に映し出される対象は，撮影者の極めて私的な世界や固有のイメージ，すなわち独自性を表現するものである。例えば，自叙写真が自分を表している程度について被験者が記した文章の中には，“私が見たらとても私が表れている。どの写真を見ても自分が思い浮かぶ。他の人が見たら「どこが？」と思われるかもしれないが”とか，“自分が良かれと思って撮った写真で，自分の観念にもとづいているから自分では良くわかるが，人に見せれば全く理解できないと思う”などの記述が複数見出されている（向山，2002c)。これらの記述から，自叙写真として表現された自己概念は極めて私的なものであり，合理性を欠いているために他人には理解し難い場合も多いことがわかる。先行研究において自叙写真を個性の表現とみなし，アイデンティティ (Dollinger & Clancy Dollinger, 1997) や創造性 (Dollinger, Robinson et al., 1999) などとの関係が検討されてきたのも，このような理由によると思

われる。

また撮影された事物・事象はその具体性ゆえに個々の写真にまつわるエピソードを喚起しやすく，自叙写真を手がかりにして個人の私的世界への理解を深めうると考えられる。WAY や TST はこれまで自己概念への個性記述的アプローチとされてきたが，この方法で得られる典型的な反応である「私は○○です」という表現（e.g. 松原，1999）は，自分に関する比較的抽象度の高い概念化された叙述であって，このような叙述から，関連する具体的なエピソードやエピソードにまつわる感情は喚起されにくく，そのため WAY や TST では個人を概念的に把握することはできても，現象学的理解や人生に対する物語的な理解は難しいという指摘がある（辻，1993）。辻 (1993) は，個人を現象学的・共感的に理解するためには抽象的で概念化された記述ではなく，その人物の生き生きした具体的イメージを捉える必要があるとし，小説家が登場人物の特徴をエピソードの累積によって描写したり臨床家がクライエントの体験をエピソードから理解したりする例を挙げ，体験が情動を伴った具体的エピソードとして伝達されることが不可欠であると述べている。自叙写真は自己概念研究における“自叙伝的かつ自己物語的な方法 (autobiographical and self narrative method)”の 1 つとされており (Dollinger et al., 1996)，この方法では WAY や TST よりも具体的かつ私的な自己の側面が表現されることから，自叙写真は見る人の想像力や連想を刺激し，エピソードや感情を喚起する素材となると考えられる。したがって，この方法を用いることで自己に関する，より個性記述的な研究が期待できる。

自叙写真の第 2 の特徴は，自己を見る視点と注意の焦点にあると思われる。これを，(a) 撮影時の自己をみる視点，(b) 撮影時の注意の焦点，(c) フィードバック時の自己を見る視点から述べる。まず，(a) 撮影時の自己を見る視点に関して，“あなたは誰ですか？”という問いは回答者の内省を促す。したがって，自己の内面すなわち私的側面に注意が焦点づけられ，動機・情動・特性など自己についての内的情報がもたらされると考えられる。これは WAY や TST のみならず自叙写真も同様である。しかし自叙写真の手続きでは，“自分で撮れない場合は他の人に撮影してもらっても良い”として，他者による撮影も認めている。この典型は自分自身を他者に撮影してもらう状況であろう。このような場合，視点は外在的となり，他者から観察可能な自己の側面（公的側面）に注意が向けられることになる (Buss, 1980)。また他者を撮影する状況も被写体となった他者からの視点を意識することになろう。WAY や TST においても自己を見る視点の外在化は可能であるが，これらと比較すると自叙写真は自己を見る視点の外在化をより方向づけ，そのような状況を特定しやすい課題であると考えられる。

続いて，(b) 撮影時の注意の焦点に関しては，内省による自己報告を求める WAY や TST では，撮影中の注意の焦点は内面・外面を問わず自己にあると考えられる。自叙写真においても同様に注意は自己に向けられると思われるが，自叙写真では自己を表現する素材を撮影可能な周囲の事物・事象に求めるため，注意の焦点は自己と撮影対象との間を，他者が被写体となる場合には他者との間を移動するであろう。また自分自身が被写体となる場合にも，注意の焦点は自己（特に外面）と撮影者である他者との間を移動することが考えられる。

最後に，(c) フィードバック時の自己を見る視点に関しては，自叙写真では視覚的フィードバックによる視点の外在化が予想される (Buss, 1980)。回答が言語素材か視覚素材かにかかわらず，“あなたは誰ですか？”という問いに対する答えをフィードバックされることは，内省による自己客観視を促すと考えられる。しかしながら，写真は自分自身や周囲の事物・事象についての現実を示すものであり，現像された自叙写真を見る行為は自分自身や周囲の環境を他者の視点から見直すことによって，自分や周囲の事物・事象に対する客観視を促す効果があると思われる。

女子大学生を対象とした結果では，自叙写真には“身の回りの物や人”“身近なもの”“自分の生活”“自分に関係あるもの”“育ってきた環境や影響を受けた出来事”と表現されるような事物・事象が撮影されることが示されており（向山，2002c），課題に対する感想の中には，“写真に撮ることを意識していると何気なくしている行動がわかる”“頭で考えていたのが意外とそのまま顔（表情）に表れていない”“自分を表すものが意外とあることに気づいた”“普段から見ているものを写真にしてみるとまた見

方が変わる”“写真ができてからもっといっぱい思いつくことが見つかった”など，自叙写真を撮ったり見たりすることによって自分自身や周囲の事物・事象への新たな気づきがあったという記述や，“自分を見つめ直す良い機会になった”“客観的に自分を見つめることができた”などの記述が見られた（向山，2004）。これは自叙写真の撮影やフィードバックが，普段はあまり意識することのない自己の側面や周囲の事物・事象に注意を向けさせ，自己とそれらとの関係について考察する機会を与えること，また自叙写真が自己客観視を促進する手段として有効であることを示すものと思われる。以上で述べたような自己や環境への注意・関心の高まりや視点の外在化による自己客観視の促進といった効果は，従来の内省と言語報告による測定法においても見られるが，自叙写真ではよりその効果が顕著となることが期待できる。

第3の特徴として，自叙写真の撮影過程で表現への創作意欲や想像力が喚起され，新奇で非日常的な体験に対する好奇心や満足感を生むことがある。これはパーソナリティの5因子理論での遊戯性（辻，1998）にも関係する心的側面であろうが，女子大学生の自叙写真に対する感想の中には，“何を撮ろうか考えるのが楽しかった”“自分を表すものを探して撮るというのが楽しかった”“できあがった写真を見ると意外と面白い”などの記述や，“懐かしい場所に行って昔の自分が思い出された”“めったに行かない場所に行くことができた”“夜の人通りのなくなったところを探して写真を写したり良い経験ができた”などの記述が見られた（向山，2004）。これより，自叙写真が創作意欲や想像力を刺激する課題であり，撮影活動が新奇で非日常的な体験となる場合があることがわかる。このような課題のもつ遊戯的性質が被験者に及ぼす効果は，従来の内省と言語による自己報告による研究ではほとんど取り上げられてこなかった事柄であろう。自叙写真という課題がこのような性質を持つことから，自叙写真の被写体や内容に注目するだけでなく，例えばDollingerらの研究グループが実施しているような写真冊子全体から自己表現の質を問うことも，また意義のあることと思われる。

ここまで，自叙写真について表現の具体性と独自性，視点の外在化と注意の焦点の移動，課題の持つ遊戯的性質が被験者に及ぼす効果という3点からその特徴をまとめ，この方法が自己概念研究において個性記述的なアプローチとして利用できる，また従来の内省と言語報告による方法を補完する手段となりうる可能性について述べた。ところで，自叙写真はWAYやTSTの教示を踏襲しながらも，回答に写真という非言語的手段を用いるところに測定法としての新しさがある。では写真を用いることによって，この方法は自己概念のどのような側面にアプローチできるだろうか。先に述べたように，この方法の創始者であるZillerは，自叙写真によってイメージとして表象されている個々人のorientationsを捉えようと試みた。イメージのような明瞭に言語化しにくい自己概念の一側面は，自己概念の理論の中ではどのような位置づけが可能であろうか。続いてEpstein (1983, 1990, 1994) の提唱する認知経験的自己理論 (Cognitive-Experiential Self Theory: 以下CESTとする）に準拠しつつ，意識水準と測定法について整理し，自己概念の測定に言語ではなく写真を用いることの意義を明らかにしておきたい。

自己概念研究における自叙写真の意義：意識水準と測定

CESTは“科学者としての人間モデル”に沿った理論である。“科学者としての人間モデル (Kelly, 1955)”とは，科学者がデータを体系づけ，現象を予測するために理論を持つのと同様に，人は自分を取り巻く世界で起こる出来事や経験を理解し，予測し，統制するために自分自身や世界についての理論を持つと考える。このモデルに従うと，我々は日々の経験を扱う上では誰もが皆，科学者なのである。

CESTでも，人は日々の生活における経験を理解し，予測し，統制するために世界や自分自身に関する自分なりの理論を持つと仮定する。これら理論は“現実についての個人的理論 (personal theories of reality)”と呼ばれる概念の体系であり，このうち自分自身についての概念体系が自己理論である[3)]。従来のモデルでは，人はこのような自分自身や世界に

3) Epsteinによれば“自己についての理論”は新しいデータにより変容し，一方で新たなデータの獲得に影響力を持つ．このような概念体系の機能を重視し，従来の自己概念を自己理論という名称で再定義している。

関する理論を自覚しており，したがって内観にもとづく言語報告が可能であると考えられてきた。しかしながらCESTでは，自己理論を意識の水準で機能する概念体系として考えるのではなく，前意識や無意識の水準でも機能する概念体系と仮定する。なお，ここでの前意識とは直接気づくことはできないが努力すれば意識できる水準を指し，この水準にある素材は意識化に際して不安が喚起されることはないと考えられている。このように意識水準・前意識水準・無意識水準に，それぞれ固有の構成要素と論理法則を持つ半ば独立した3つの概念体系を仮定することで，人間の行動をこれまで以上にうまく説明し，予測できるという。以下では3つの意識水準で機能する概念体系とそれぞれの水準に応じた概念体系の測定法について考察する。

まずCESTでは，意識水準で機能する概念体系を合理的概念体系(rational conceptual system)と呼ぶ。この概念体系は言語や数といった慣習的シンボルによって符号化されており，意識的かつ論理的思考において機能する。したがって，時間のかかる抽象的・非感情的な思考や分析に適する情報処理の体系と考えられている。意識水準にある合理的概念体系は行動に大きな影響力を持つことから，これまでにも様々な方法で測定が試みられてきた。WAYやTSTをはじめとする意識的内省に基づく様々な自記式の質問紙は，自己概念の中でも合理的概念体系に属する部分を把握するための測定法といえるだろう。

さて，CESTでは前意識水準において機能する概念体系，すなわち経験的概念体系(experiential conceptual system)を，意識水準で機能する自己概念とともに行動の決定因として重視する。この概念体系は情動体験と密接に結びついており，論理や証拠よりもむしろ感情や個人的福利(personal welfare)を優先する“感情論理”とも呼ぶべき論理に従って機能する。また，これは即時的で行動志向的な情報処理の体系であり，進化の見地からは，合理的情報処理体系の発生に先んじて適応的生存のために発達してきた情報処理体系と考えられている。経験的概念体系の高次の部分は合理的概念体系と重複していて相互伝達が可能であり，適応的問題解決にはこれら2つの概念体系が共に関与する必要があるとされる。また2つの概念体系の相互作用は日常生活における問題解決だけでなく，時に直観的な知恵(intuitive wisdom)や創造性の発露につながるという。経験的概念体系は，当人さえ気づかないような習慣化・自動化された私的な言語（内言のようなもの）や具体的イメージ，メタファーによって符号化されており，通常，これらを用いて当人にはほとんど意識されることなく自動的かつ瞬時に思考がなされている。したがって，その内容や過程を意識的内省によって把握するには，かなりの努力が必要となる。このためEpsteinは，経験的概念体系の推察には言語反応よりもむしろ繰り返される行動パターンや情動に注目する必要があると述べている。その人の特有の行動や情動，それらが触発・喚起される状況や過程を丹念に調べることで，その背後にある概念体系の内容，機能，構造を推察するのである。

さて，このような経験的概念体系に属する自己概念はどのように測定が可能であろうか。当人にも必ずしも覚知されていない，あるいは言語化できない漠然とした自己イメージやその情緒的意味を測定する方法として，これまでにセルフ・ディファレンシャル（長島 他，1966, 1967）や，IMQ（Image Question: 梅本・河合・斎藤・出井・岡田，1972）が案出されている[4]。前者は広く自己に関する記述の修飾語（形容詞や形容動詞など）を収集・整理して尺度を作り，それを用いて自己概念の内包的潜在的意味を捉えようとするものである。後者は動物や植物や事物のイメージを自己像・父親像・母親像などのアナロジーとして象徴的に表現させ，さらに反応について理由を書かせるという手続きによって，各人の持つイメージを理解しようと試みたものである。言語を媒介としてイメージを測定するこれらの方法は，文章完成法とともに質問紙法と投影法の中間領域の方法とされている（住田・斎藤，1973）。しかしCESTに立脚すれば，当人さえ気づかないような習慣化・自動化された私的言語や具体的イメージ，メタファーで構成される経験的概念体系に属す

4) IMQでは，例えば“わたくしはAにたとえるとBに似ているようです。それはわたくしがCだからです”という文章について，A欄には植物・動物・動植物以外の3語のうちのいずれかを検査者が指定して記入させ，その後，B欄とC欄を被験者が自由に記述する，という手続きをとる。

る自己概念の測定には，先のセルフ・ディファレンシャルやIMQなどの言語を用いた質問紙よりも，非言語的反応を指標とする方法が適しているといえるだろう。

例えば，写真はイメージを捉える手段としてこれまでにも使用されてきており(Milgram, 1976; Noji, 1999; Ziller, 1990)，自己についてのイメージも写真を用いて表現することができる（向山，2002b)。また，周囲の環境や自分自身の姿あるいは日常的行動を写した写真から，その人特有の行動や感情が触発されたり喚起されたりする状況についての手がかりを得たり，写真を提示しながら生い立ちを語ってもらったり(e.g. McAdams, 1999)，写真を連想の材料として用いることによって，普段は意識されることのない経験的概念体系の内容を知ることができるのではないだろうか。したがって，自叙写真を用いて経験的概念体系に属する自己概念の内容を捉えられる可能性がある。自己概念のうちで明瞭に言語化できる部分，すなわち合理的概念体系に属する自己概念に専ら焦点をあててきた従来の研究に対し，言語ではなく写真を用いることによってイメージのような通常は意識されにくく言語化が難しい自己概念の内容にアプローチしうるところに自叙写真の意義があると思われる。

さて最後に，無意識水準で機能する概念体系をCESTでは連想的概念体系(associationistic conceptual system)と呼ぶ。ここでは視覚的な形態をとった隠喩が用いられ，Freudが記述した1次過程の思考，すなわち連想的思考・願望的思考・具体的な視覚心像・置き換え・圧縮・場所や時間の拘束を考慮しないこと，などの論理法則が適用されるという。ただし，これまでのところCESTでは連想的概念体系と経験的概念体系の違いは十分に明らかにされているわけではない。このような1次過程の法則に従う思考は従来，投影法により測定されると考えられてきた。通常，投影法では被験者自身に関することを直接に問いかけることはない。これは，検査の目的，反応の処理や解釈が被験者にはわかりにくいため，自身が気づかないうちに自己を投影してしまうと仮定されているためである。そして投影法の持つ非構造的で曖昧な刺激状況ゆえに，被験者自身の抑圧された無意識の欲求，受け入れ難い感情や態度など，内省で捉えうる範囲外の情報が表出されると考えられている。精神分析の立場では，不快な思考や感情は抑圧によって防衛され，直接表現されずに迂回路を通るとされる。投影法が概念化された当初，空想は自我防衛をすり抜けるものとみなされており，空想への刺激として図版等が使われ，被験者の反応は内的心理力動を象徴的に表現するものとみなされた（デビソン＆ニール，1998)。現在では，投影法で得られる反応には抑圧された欲求や感情のみが表出されるのではなく，当人が意識している欲求や受容し得る欲求も含まれるという理解が一般的である。それでも意識外の深い情報を得る，あるいは投影というメカニズムが機能するためには，“私”を直接問わないという手続きは重要であろう。WAYやTST，そして自叙写真では被験者に“私（あなた）は誰ですか？”という問いかけを行う。したがって，これらの測定法は投影法と同様に被験者にとって回答の自由度は高いとはいえ，ここで扱われる自己についての内容は意識水準あるいは意識化可能な前意識水準の素材に限られるといえよう。

写真の特徴と自己概念研究における使用目的

さて，最後に写真という手段や素材が自己概念に関連した研究の中でこれまでいかなる目的で使用され，それは写真のどのような特徴に依拠しているのかについて述べておきたい。これまでの写真の使用についてまとめることで，自叙写真としての使用の独自性を示すとともに，写真素材や撮影活動の特徴や利用可能性を広く紹介することができよう。以下では写真の使用目的を，(a)写真を情報源とする，(b)撮影活動による効果を得る，(c)写真の提示による効果を得るという3つに分け，それぞれについて写真という手段や素材の持つ特徴と対応させながら研究例を挙げて解説する。

まず，(a)写真を情報源とするという目的での使用は，写真を何らかの情報を得るための資料として用いる場合である。これは視覚的な情報の記録・伝達に関しては，言語よりも写真が適切な手段とみなされてきたことによる。例えば表情や姿勢，空間的位置など人の非言語的な表出に注目し，それらと心理的特徴との対応を調べるなど，写真に捉えられた現象は個人の心理的特徴を推察するために用いられることもある。写真から情報を得る目的，情報の種類，分析や解釈の背景となる理論は様々であるが，

例えば人々の自然な姿勢から性別による非言語的表出の違いを検討する (Mills, 1984; Klein, 1984) など社会心理学での使用から，家族療法において家族写真からメンバー間の情緒的つながりを推測する (Kaslow & Friedman, 1977)，精神力動的解釈のための素材とする (Akeret, 1973) などの心理療法での使用に至るまで，写真は視覚的な情報を記録・伝達するために活用されてきた。

(b) 撮影活動による効果を得るという目的での使用は，写真撮影という行為を何らかの刺激として用いる場合である。これは写真撮影という活動には自分自身や周囲の事物・事象へと注意を向けさせる効果があるとみなされてきたこと，また撮影活動そのものが興味や意欲を喚起する課題とみなされてきたことによる。例えば，心理臨床や看護の現場で写真撮影を治療に導入した報告がある。Hunsberger (1984) はクライエント自身による写真撮影を活動療法 (activity therapy) における効果的な課題として紹介しており，撮影活動はクライエントの統御力・自己信頼・自尊心を高める効果があるほか，特にグループでの撮影活動は社会的相互作用の増大や社会的スキルの促進，問題解決やリーダーシップの発揮などによる自尊心の高揚が期待できると述べている。加えて，写真撮影という活動は低い精神機能，器質障害，情緒障害を示すクライエントなどにも広く活用できるとも記している。高齢者への適用はその一例といえよう (Aronson & Graziano, 1976; Zwick, 1978)。

(c) 写真の提示による効果を得るという目的での使用は，写真という素材を何らかの刺激として用いる場合である。これは写真が現在や過去の現象を伝える媒体であり，写真のフィードバックには記憶の活性化や感情喚起の効果があり，自己洞察を促進させると見なされてきたことによる。したがって，(b) の撮影活動の効果を目的とした使用と同様に治療現場での使用が試みられている。これまでに，ラポールの形成や投影の材料としての利用するほか，過去に撮影された写真をクライエントによる自己報告の確認や歪んだ知覚や記憶の修正のために使う，幸福だった頃の写真を見せて同様の感情を喚起させる，老年期における人生を振り返る手助けとする，意識されていない事柄や葛藤を意識化するために用いる，悲嘆や喪失体験への取り組みを促進するなどの例がある (Hunsberger, 1984)。また，写真の掲示を行動修正のための強化子として用いたり (Bacon-Prue, Blount, Hosey, & Drabman, 1980)，クライエントを被写体としたポートレートをセルフ・イメージの認識や修正，自尊心の高揚を目的としたエクスポジャーの材料として使用したりすることもある。ポートレートの提示による治療的な試みとして統合失調症患者 (Miller, 1962; Spire, 1973) や非行少年 (Fryrear, Nuell, & Ridley, 1974) を対象とした報告があるが，これらの研究に関しては実験の中で写真を提示することの効果とフィードバック時に治療者が積極的に関与することの効果が分離できていないという手続き上の問題が指摘されており，写真提示そのものの治療効果は確証されていない。なお，写真の持つ可能性を積極的にセラピーに取り入れている Weiser (1999) のフォト・セラピーでは，クライエント自身のポートレートだけでなく，他者が撮影したクライエントの写真，クライエントが収集している写真，家族アルバム等の自叙伝的な写真などがセラピーの中で使用されている。

以上，自己概念に関連した研究において写真を使用する目的と写真という手段や素材のもつ特徴を 3 つの点からまとめた。ところで自叙写真を用いた研究では，これまで先の (a) の目的と同様，情報源として写真が使用されてきたといえる。しかし自叙写真は“自己をテーマにする”という点で単なる視覚的な情報の記録・伝達というよりはむしろ，写真という非言語的な手段を使って個人の現象的世界を把握する試みであり，撮影者にとっては自己を表現する課題となる。また先行研究では積極的に試みられてはいないが，(b) の撮影活動による効果を得ることや，(c) の写真の提示による効果を得ることを目的として自叙写真を使用することも可能であろう。したがって，自叙写真は (a) から (c) のいずれの使用目的にも適うものであり，加えて個人の現象的世界の把握および撮影者の自己表現のための媒体となるという点で，従来の写真の使用目的を超えた独自性をもつものである。

近年，カメラはインスタントからディジタルに至るまで安価で軽量な機器が出回り，“プリクラ”や電子メールを用いた画像の交換も気軽になされるようになった。写真撮影は記念日や旅先での行動などの非日常を記録することから，ごく日常的なコミュニ

ケーションの手段へと変化しつつある。このような日常での急速な普及に対し，心理学の研究の中では，写真は実験や臨床現場において何らかの反応を得るための刺激として使われたり，現象の記録のために使われることはあっても，写真を反応の手段として用いたり，写真に表現された素材を研究の対象とすることにはあまり関心が払われてこなかったように思われる。このような傾向は本邦でも同様であり，自叙写真を用いた研究も日本ではこれまでほとんど紹介されていない。

これに関して，いずれも確定的なものではないが，様々な理由が考えられる。まず，写真の使用目的の部分でも紹介したように，これまでは医療や心理臨床の現場での治療を目的とした使用が多く，研究的な興味とは幾分異なる文脈において写真や撮影活動に関心が向けられてきた可能性がある。また，写真を含めた視覚的素材は従来，主に文化人類学や社会学といった研究分野で取り扱われてきており(e.g. Emmison & Smith, 2000)，これらが心理学における研究の対象とはみなされにくかった可能性もある。さらに，自叙写真はカメラを用いて撮影者が現実に生活している環境下でデータを収集するという点でフィールド・ワーク的な要素を持つ。この手続きは実験室での実験や質問紙調査を超えるものとしてZillerが重視する自叙写真の特徴であるが，質問紙法が主流をなしてきた自己概念の研究領域では，このようなフィールド・ワーク的な手法にはあまり関心が向けられてこなかったのかもしれない。しかしながら，写真という手段や素材には言語による方法や測定結果とは異なる特徴がある。これら写真の特徴を活かした自叙写真という方法を用いることによって，従来の方法で測定されてきたものとは異なる自己の側面，すなわち通常は前意識的・暗黙的で明瞭に言語化しにくい自己概念についての手がかりを得ることができるのではないだろうか。またこのような自己概念を把握することが，個人をより深く理解することへとつながるものと考える。今後は，自叙写真を用いた本邦でのさらなる研究成果の蓄積が望まれる。

引用文献

Akeret, R. U. 1973 *Photoanalysis*. New York: Wyden.

Amerikaner, M., Schauble, P., & Ziller, R. 1980 Images: The use of photographs in personal counseling. *The Personnel and Guidance Journal*, **59**, 68–73.

Aronson, D. W. & Graziano, A. M. 1976 Improving elderly clients' attitudes through photography. *The Gerontologist*, **16**, 363–367.

Bacon-Prue, A., Blount, R., Hosey, C., & Drabman, R. S. 1980 The public posting of photographs as a reinforcer for bedmaking in an institutional setting. *Behavior Therapy*, **11**, 417–420.

Bugental, J. F. T. & Zelen, S. L. 1950 Investigations into the 'self-concept' I: The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, **18**, 483–498.

Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: W. H. Freeman and Company.

Combs, J. M. & Ziller, R. C. 1977 Photographic self-concept of counselees. *Journal of Counseling Psychology*, **24**, 452–455.

デビソン，G. C. & ニール，J. M. 村瀬孝雄（監訳）異常心理学 1998 誠信書房 (Davison, G. C. & Neale, J. M. 1994 *Abnormal Psychology*. 6th ed. New York: John Wiley & Sons).

Dollinger, S. J., & Clancy, S. M. 1993 Identity, self, and personality: II. Glimpses through the autophotographic eye. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 1064–1071.

Dollinger, S. J. & Clancy Dollinger, S. M. 1997 Individuality and identity exploration: An autophotographic study. *Journal of Research in Personality*, **31**, 337–354.

Dollinger, S. J. & Clancy Dollinger, S. M. 2003 Individuality in young and middle adulthood: An autophotographic study. *Journal of Adult Development*, **10**, 227–236.

Dollinger, S. J., Cook, C.A., & Robinson, N. M. 1999 Correlates of autophotographic individuality: Therapy experience and loneliness. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 325–340.

Dollinger, S. J., Preston, L. A., O'Brien, S. P., & DiLalla, D. L. 1996 Individuality and relatedness of the self: An autophotographic study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 1268–1278.

Dollinger, S. J., Robinson, N. M., & Ross, V. J. 1999 Photographic individuality, breadth of perspective, and creativity. *Journal of Personality*, **67**, 623–644.

Emmison, M. & Smith, P. 2000 *Researching the visual*. London: Sage.

Epstein, S. 1983 The unconscious, the preconscious, and the self-concept. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Psychological perspective on the self*. Vol. 2. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Pp. 219–247.

Epstein, S. 1990 Cognitive-experiential self-theory. In L. Pervin (Ed.), *Handbook of personality: Theory and research*. New York: Guilford Press, Pp. 165–192.

Epstein, S. 1994 Integration of the cognitive and the psychodynamic unconscious. *American Psychologist*, **49**, 709–724.

Fryrear, J. L., Nuell, L.R., & Ridley, S. D. 1974 Photographic self-concept enhancement of male juvenile delinquents. *Journal of Cousulting and Clinical Psychology*, **42**, 915.

Hunsberger, P. 1984 Uses of instant-print photography in psychotherapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, **15**, 884–890.

Kaslow, F. & Friedman, J. 1977 Utilization of family photos and movies in family therapy. *Journal of Marital and Family Therapy*, **3**, 19–25.

Kelly, G. A. 1955 *The Psychology of personal constructs*. New York: Norton.

Klein, Z. 1984 Sitting postures in males and females. *Semiotica*, **48–1/2**, 119–131.

Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68–76.

松原達哉 1999 自分発見「20 の私」東京図書.

McAdams, D. P. 1999 Personal narratives and the life story. In L. A. Pervin & O. P. John (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* 2nd ed. New York: Guilford Press, Pp. 478–500.

Milgram, S. 1976 The image-freezing machine. *Society: Social Science and Modern Society*, **14**, 7–12.

Miller, M. F. 1962 Responses of psychiatric patients to their photographed images. *Diseases of the Nervous System*, **23**, 296–298.

Mills, J. 1984 Self-posed behaviors of females and males in photographs. *Sex Roles*, **10**, 633–637.

Monteiro, J. M. C. & Dollinger, S. J. 1998 An autophotographic study of poverty, collective orientation, and identity among street children. *Journal of Social Psychology*, **138**, 403–406.

向山泰代 2001 自己記述写真法による自己概念の研究 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 950.

向山泰代 2002a 自叙写真法による自己概念の研究 京都ノートルダム女子大学研究紀要, **32**, 87–93.

向山泰代 2002b 自己概念研究における自叙写真法の意義 甲南女子大学学生相談室年報, **2**, 33–41.

向山泰代 2002c 写真に表現された自己の諸側面—被写体と内容にもとづく自叙写真の分類— 京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科研究誌「プシュケー」, **1**, 81–94.

向山泰代 2003 自叙写真を用いた自己イメージ把握の方法—自叙写真法の実施手続きに関する調査報告— 日本応用心理学会第 70 回大会発表論文集, 111.

向山泰代 2004 自叙写真を用いた自己イメージ把握の方法—自叙写真法の実施手続きに関する検討— 京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科研究誌「プシュケー」, **3**, 11–24.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀　洋道　1966　自我と適応の関係についての研究 (1): Self-Differential 作製の試み　東京教育大学教育学部紀要, **12**, 85–106.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀　洋道　1967　自我と適応の関係についての研究 (2): Self-Differential の作製　東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59–83.

Noji, A. 1999 Quality of life for changing health: Perimenopause among Japanese in Japan and the USA. In T. Aso, T. Yanaihara, & S. Fujimoto (Eds.), *The proceedings of the 9th International Menopause Society World Congress on the Menopause*. New York: The Parthenon Publishing Group, Pp. 127–132.

Okura, Y., Ziller, R. C., & Osawa, H. 1985–1986 The psychological niche of older Japanese and Americans through auto-photography: Aging and the search for peace. *International Journal of Aging and Human Development*, **22**, 247–259.

Spire, R. H. 1973 Photographic self-image confrontation. *American Journal of Nursing*, **73**, 1207–1210.

住田幸次郎・斎藤久美子 1973 質問紙法と投影法の中間領域の方法 倉石精一（編）臨床心理学実習: 心理検査法と治療技法 5 節　誠信書房　Pp. 102–108.

辻　平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.

辻　平治郎（編）1998　5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房 .

梅本堯夫・河合隼雄・斎藤久美子・出井淑子・岡田康伸 1972　IMQ 作成の試み　京都大学教育学部紀要, **18**, 154–170.

Weiser, J. 1999 *Phototherapy techniques*. 2nd ed. Vancouver: Phototherapy Centre Press.

Ziller, R. C. 1990 *Photographing the self*. Newbury Park, CA: Sage.

Ziller, R. C. & Lewis, D. 1981 Orientations: Self, social, and environmental percepts thorough auto-photography. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **7**, 338–343.

Ziller, R. C. & Rorer, B. A. 1985 Shyness-environment interaction: A view from the shy side through auto-photography. *Journal of Personality*, **53**, 626–639

Zwick, D. S. 1978 Photography as a tool toward increased awareness of the aging self. *Art Psychotherapy*, **5**, 135–141.

（受付：2004. 8. 27, 受理：2004. 12. 24）